

# CURES NEWSLETTER

地域経済  
ニュースレター

1998. 3 .25 No.46

## 巻頭言

### 「創造性」の経済学

佐々木 雅 幸

昨年末に都市経済研究のまとめとして『創造都市の経済学』(勁草書房)を上梓した。

そこではまず最初に「創造都市」、つまりクリエイティブ・シティ Creative City という概念を提示し、「世界都市の時代から創造都市の時代へ」という論点を打ち出したが、幸いにもこれは非常に新鮮で、野心的な問題提起であるという評価を受けている。その理由はさまざまにあると思われるが、20世紀末の今日、次世紀に向けて本来なら人類社会にとって輝かしい将来のイメージが判然としなければならないにもかかわらず、明確なビジョンが見えてこないばかりか、逆に世界はますます混沌と化し、日本経済は未曾有の経済危機

の直中にあり、金融システムの根本的な崩壊現象に直面している。あるいは、「21世紀はアジアの世紀となる」と言われていた一方で、アジア経済・金融危機がいよいよ深まっているという事実がある。他方で、アメリカ経済は7年連続の好景気を謳歌しているが、ウォールストリートの株式市場はバブルの警戒水準を越えているとみられており、企業のダウンサイジング戦略によって勤労者の多くは不安定雇用状態におかれ、所得が減少しており、アメリカの将来も決して明るくはない。

そのような世紀末の閉塞状況の中で、欧米でも日本でも困難な現状を打開するためのキーワードとして「創造性」が話題になってい

- 巻頭言 ..... 佐々木 雅 幸
- CURES Report
  - 「インドの経済改革と日本企業の進出」..... 村 田 武
  - 「MAFIA CAPITALISM IN POSTCOMMUNIST BULGARIA (PART II)」...Dimitar Ialnazov
- 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

る。例えば、ヨーロッパ創造都市研究グループがまとめた『創造都市』*The Creative City* という冊子がイギリスで1995年に出版されている。これはヨーロッパ社会においても製造業が衰退し、青年の失業者が増えており、従来採用されてきた福祉国家システムが日本よりも早く財政危機に直面して、この見直しが行われるという状況の中で、国家の財政的支援から自立してどのように新しい都市の発展の方向を見いだすかという問題意識で書かれている。その際、芸術文化が持つ創造的なパワーを生かして社会の潜在力を引き出そうとするヨーロッパの都市の試みに注目し、その経験を分析したものである。

アメリカでは1997年2月に芸術・学術に関する大統領諮問委員会が答申した『クリエイティブ・アメリカ』*Creative America* と題する冊子において、アメリカ社会のクリエイティビティをどのように高めるかという問題を投げかけている。その中で芸術・学術が持つクリエイティビティこそアメリカ社会に多様性をもたらし、アメリカの民主主義社会の基礎を強化するものであると、芸術・学術を「公共財」として位置づけ、積極的に推進する政策が必要であると述べている。

日本でも中央政府の新規事業に例えば『中小企業創造法』のように「創造的〇〇事業」というものが増加しており、「創造」というキーワードが濫用されるようになってきた。また、学界でも野中郁次郎氏が『知識創造企業』*The Knowledge-creating Company* を1995年に出版し、企業サイドから見た知識創造を課題として、マイケル・ポラニー Michael Polanyi の「暗黙知」という概念を使って議論している。

野中氏は最近の論文の中で「創造する力は単に個人の内にあるのではなく、個人と個人

の関係、個人と環境の関係、すなわち「場」から生まれる」と述べている。この「場」とは、空間と時間というものをどちらも併せ持った場であり、「現在の知識が十分に作用しないとき、または新たな生存のレベルを打ち立てねばならないときに、知識の創造が主体的に生まれる」と言っている。(一橋大学『ビジネス・レビュー』45巻2号、1997年)

彼がどのような意味で「新たな生存のレベル」を問題にしているのか、確かめたことはないが、グローバルな金融危機の迫っている中で、あるいは地球環境が大変危機的な状況にあるという認識のうえに立って、「人類が生存しうるか」というレベルの問題を創造的に切り開いていくことが企業論の課題であると野中氏は言っているように思われる。

だが、私なりに理解すれば、企業はもちろんだが、創造の「場」という点から見れば、まず、都市というものが創造的でなければならない。そういう視点から野中氏の言葉との関係で創造都市の定義を整理すると、「創造都市とは、『創造の場』に富み、グローバルな人類社会の課題、あるいはローカルな地域社会の課題に直面して、生存の危機を乗り越えるために知識の創造を主体的内発的に行うことができる都市である」と言えよう。

つまり、日本だけではなく全世界的に、クリエイティビティが世紀を切り開くキーワードになってきたのである。一方で、もう一つのキーワードとしてサステナビリティという言葉がすでに提起されているが、サステナビリティとクリエイティビティとは、おそらく21世紀の初頭にかけて人類社会が共通して課題とするキーワードだろうと思われる。

「持続的で創造的な都市」の在り方をさらに探求したいと考えている。

(金沢大学経済学部教授)